

小論文 (スポーツ)

<注意事項>

- 解答は、指定された解答欄に横書きで記入すること。
- 解答は、指定された字数を超えないこと。
- 句読点、引用符、括弧などはいずれも 1 字に数える。
- 算用数字及びアルファベットが連続する場合は、1 マスに 2 字を入れる。
- 行末の句読点などは字数に数えない。

次の二つの設問に答えなさい。

【設問 1】

資料は、NHK 解説委員室ホームページ視点・論点の中の「健やかな子どもを育てる」(2012 年 3 月 20 日)からの抜粋である。

この文章を参考にしながら、子どもの体力・運動能力の低下と幼少期における「競技としてのスポーツ」実施の是非について、あなたの経験を踏まえてあなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

【設問 2】

資料は、友添秀則・近藤良享 共著 (2000 年)「スポーツ倫理を問う」(大修館書店)の中の文章である(一部抜粋)。

これを読んで、教え子の、「N先生の戦術はスポーツマンシップに反すると思いませんか?」という問いに対して、あなた自身の考えを 600 字以内で述べなさい。

設問1の資料

NHK 解説委員室 ホームページ 視点・論点 「健やかな子どもを育む」

山梨大学教授 中村和彦

(前略)

文部科学省が1964年から、6歳から19歳までの青少年を対象として継続的に実施している「体力・運動能力調査」の結果によると、子どもたちの、走る・跳ぶ・投げるといった基礎的な運動能力は、1985年前後をピークに著しい低下傾向にあり、柔軟性、敏捷性、平衡性などの体をコントロールする能力も低下しています。子どもの体力の低下は、最近になって下げ止まりの状況にありますが、いまだ顕著な向上はみられていません。また体力・運動能力の低下は、児童期以降だけではなく、幼児期にも同様に認められることも明らかにされています。

このような子どもの体力・運動能力低下の要因として、「運動量の減少」と「基本的な動作の未習得」といった2つの原因をあげることができます。

いまの小学生の1日の歩数は、平均で12000歩です。1970年代の小学生の歩数は20000歩以上でした。つまりこの40年間で、日本の小学生の歩数は半減したことになります。

(中略)

次に、基本的な動作の未習得について考えてみましょう。日常生活、体育、運動遊びにおいて出現する「走る」「投げる」「転がる」といった7種類の基本的な動作の運動の仕方を観察的に評価する方法を用いて、今日の幼児と、体力・運動能力が高いレベルにあった1985年の幼児の動作の習得状況を比較してみました。その結果、今日の5歳児の基本的な動作の習得状況は、1985年の3歳児とほぼ同様な状況であることがわかりました。(中略) 子ども達の動きの習得は、未熟なレベルでとどまっているといえます。

私は、今の子ども達の運動量が少なく、動きを十分に習得できていない背景に、今日の日本の子どもの運動やスポーツの経験のしかたに問題があると考えています。

すなわち多くの子ども達は、園や学校から帰った後、体を使って自由に遊ぶことはなく、また道路や空き地で遊びとして行われていた三角ベースなどの「子どもスポーツ」は、組織化された競技スポーツに変化しています。いま活動的といわれる子ども達の多くは、サッカー・野球などのスポーツ少年団や運動部、スイミング・体操などのスポーツ・クラブにおいて「競技としてのスポーツ」を経験しています。その中で子ども達は一つのスポーツしか実施していません。このような子どもの遊びの減少や、単一スポーツ化は、少年期や青年期のみではなく、より低年齢化の様相を見せています。

子ども達が、さまざまな動作を経験しながら運動量が保障されるような遊びの充実とともに、子どものスポーツの在り方を見直さなければならない時期にきています。

(中略)

私は、日本の子どもたちのライフスタイルが崩壊し、子ども達の体にさまざまな問題が生じた原因は「子ども」にあるのではなく、私たち「おとな」にあると考えています。

私たちは、子どもの頃、戸外で仲間とからだをいっぱい使って遊び、おいしくご飯を食べ、ぐっすり睡眠をとっていました。そして気持ちよく目覚めて、元気に園や学校に行って仲間と活動していました。遊び込んでいた私たちが、子どもの頃に経験したこと、学んだことを、今の子ども達も経験し、学ぶ中で、健やかな体を育ててほしいと思います。

出題者注 出題の都合上、原文を一部省略、変更しています。

設問2の資料 「スポーツ倫理を問う」 友添秀則・近藤良享 共著、大修館書店

二〇〇〇年、一七五―一七七頁より抜粋)

「私たち選手一同は、スポーツマンシップに^の則^りて正々堂々と戦うことを誓います」
抜けるような青空の下、静寂を破り、選手宣誓の音がグラウンド一杯に広がります。

二〇〇×年十月×日、体育の日。A県中学校ソフトボール地区大会の幕が切って落とされました。緒戦、N中学校対S中学校。N中学校の攻撃で試合開始。小柄な一番打者の紗織は捕手寄り、しかもホームプレート寄りのところで前かがみに構えました。打つ素振りひとつみせません。投手にとっては、ストライクゾーンが小さく、投げにくい相手です。結局、紗織は相手投手から四球を誘い、一塁に出塁しました。

一番手は、いかにも駿足^{うんとそく}そうな真業。左打席で投手寄りに構えています。バントをするのは明らかです。予想通りバントです。バントだとわかっていても、うまく処理できないのが中学生。前進守備のファーストは、そばを走る真業の足音に気を取られ、一塁にカバーに入った二塁手へ暴投しました。その間に、二人の走者は二塁と三塁に進みました。「落ち着いて、落ち着いて」。守備側は、みんなで声をかけ合います。

三番打者の静がバッターボックスに入りました。その時、攻撃側の監督は、「ファーストをねえ！」と大きな声で叫びました。エラーで動揺しているファーストは、今にも泣き出しそうです。バックホームに備え内野は前進守備ですが、三番打者にバントはないだろうと高をくくっています。「えっ！」と驚きの声が守備側のベンチからもれました。予想に反し、三番打者はまだ動揺しているファーストめがけて、まだバントをしたのです。悪夢の再現。あわてたファーストは、今度はホームプレートのキャッチャーへ暴投。ボールは、だれもないバックネットに向けてコロコロ転がっていきます。あつという間に二点が入りました。この後の試合展開は「想像におまかせしますが、N中学校は盗塁とバントで難なく点を取り、S中学校の闘志を奪ったことをお話して幕を閉じます。

これは、教え子の実話をもとにソフトボールの試合場面をドラマ風に再現したものです。N中学校のN先生は、この後の試合も主にバントと盗塁で点を取り、地区大会を制覇し全国大会まで出場したといいます。教え子は興奮しながら、「N先生の戦術はスポーツマンシップに反すると思いませんか？」と私に同意を求めてきました。先の試合場面は問題を焦点化するために、少々誇張していますが、ここではN先生のようなルールに反しない戦術がスポーツマンシップに反するかどうかを考えることにします。(以下省略)

平成27年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻
推薦入試Ⅰ (スポーツ)

設問1

推薦入試を受験する学生は比較的早い時期から「競技スポーツ」を実施してきたことが想定される。しかし、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育成していくことを考えると、幼少期の早い時期に競技スポーツに特化して行くことが良いとは限らない。

将来 体育・スポーツに関わるものとして多様なものの見方が出来るかどうか？スポーツや健康に対する日頃の問題意識の高さを探ることを目的に設問を設定した。

設問2

資料に示されている行為は、程度の差はあれ、様々なスポーツ場面で目にする光景である。したがって、スポーツを通じて人間の発達を支援することを志す者には、スポーツマンシップをどう捉えるかは、避けて通ることのできない重要なテーマである。この設問は、スポーツマンシップについて自分なりの考えを有し、それを踏まえて、資料で示されている行為を評価し、説得的な結論を導き出せるかを見ようとするものである。